

新潟開港150周年によせて

新潟という場所

新潟を特徴づけるもの。それは信濃川、阿賀野川という二つの大河である。これが享保16年（1731）の松ヶ崎決壊まで新潟町で合流し一大海湾を形成していた。

言うまでもなく、河川は物流の大動脈であり、時間を遡るほどその価値は顕著であった。信濃川は信州長野に発し、全長367kmを誇る日本一の大河である。阿賀野川は会津に発し210kmある。いずれもその豊富な水量は冬季に新潟県を取り巻く山岳地に降る大量の雪に由来している。そしてその雪は、日本海の水蒸気と対岸シベリアからの季節風による。信濃川の平均流量は518m³/秒、阿賀野川は451m³/秒である。これがいかに大きいものであるかは、坂東太郎と言われる利根川の水量が322m³/秒であり、ヨーロッパ6か国を流れ、1233

kmの全長を誇るライン川が230m³/秒であることからわかる。

信濃川と阿賀野川の二本の幹線が結ぶ新潟では、西は直江津から長野、京都へ、南は津川から会津へ、東は新発田から村上、東北へと繋がる文化と物流の接点でもあった。さらに眼前の日本海は中国、朝鮮、ロシアをも視野に入れた一大交流拠点であり、その中で北前船交易が発達した。

その新潟に初めて本格的に町立てをしたのが、当時長岡藩主であった堀直寄である。徳川家康は1615年に大坂夏の陣で豊臣氏を最終的に滅ぼすと、その二年後には腹心である堀直寄に新潟の町立てを命じている。江戸⇨新潟枢軸で日本全体を押さえようと考えても不思議ではない。しかも当時外国に対していたのは江

戸ではなく新潟であった。

北前船航路は蝦夷地から太平洋側を江戸に行く東回り航路もあったが、あくまでそれは補助的なものである。実際は内海である日本海を行く西回り航路こそが北前船航路の大幹線であった。日本海は北西の風の吹く冬の一時期を除けば穏やかな海である。木造船の時代、太平洋側よりはるかに安全性は高い。

蝦夷地の松前、江差、函館から秋田、能代、酒田を経て新潟へ。そこから小木、能登半島を回って三国、境、下関、関門海峡から瀬戸内海。「天下の台所」経済都市大阪までの航路である。

新潟は単にその航路の地理的中心に位置するだけではない。経済の最大の戦略物資である米の一大集積地であった。信濃川を通じ越後の米が新潟に集まったば

かりではなく、阿賀野川からは会津盆地の米も新潟に届いた。

その米を当時、米の作れなかった蝦夷地（北海道）に運び、代わりに俵物と言われた炒りこ（ナマコ）、干しアワビ、フカヒレ、昆布を積んでくる。それを大阪などの西国まで運ぶのだが、実はこれら蝦夷地の産物が金に等しく評価されるのは当時の中国であった。逆に中国の犀角をはじめとする薬種、光明朱（鉛丹）は日本ではのどから手が出るほど貴重なものであった。

関門海峡を回り、瀬戸内海を大阪まで行く正規ルートとは別に、薩摩から琉球、中国に伸びる交易ルートがあったはずである。

鎖国体制とは国を完全に閉ざす体制で

代表取締役社長

鈴木英介



はない。貿易の果実を、徳川幕府が管理し、独占する体制なのだ。そこに空いた南北の穴が、薩摩がその支配下の琉球と行う交易と、松前藩のアイヌを通じた山丹交易である。当時、日本海沿岸諸藩も何らかの形でこの流通ルートに関わっていただろう。

新潟上知（知行を返すこと）の直接の原因となった、薩摩船の新潟での難破。そこから明らかになった天保6年（1835）と天保11年（1840）の抜け荷事件は、このような経済的背景から起こっている。後に初代新潟町奉行となる公儀御庭番、川村修就による調査も新潟で唐物（薬種など）が安値で売られているという風聞から出発している。

いずれにせよ当時の北前船は買積船であり、商業資本にとって物資のないところに、あるところの物を運ぶことは経済の原理である。この仕組みには新潟商人たちだけではなく、長岡藩や会津藩、新発田藩、さらに加賀藩までも関係していたからこそ、この問題は新潟町の上知で政治決着する。

当時の日本海は想像以上の国際的広がりを持っていたと考えられる。この新潟

湊が開港150周年を迎える。

安政五か国条約による開港当時、新潟は阿賀野川がはなれ水深が浅くなり、大型船が発着する開港場としては不適なものであった。それを補ったものが新潟人による北洋漁業である。それは日本海を舞台とした長い交流の歴史のなかで育まれた。

明治22年（1889）には刈羽郡枇杷の産まれで、新潟の北越学館教師から新聞記者に転じた関矢儀八郎の魁丸による露領沿海州での操業が始まる。その後、大正9年（1920）シベリア干渉戦争を背景として沿海州ニコラエフスクにおける日本人虐殺事件（尼港事件）がおこる。同年、輸出食品、カムチャッカ漁業、日魯漁業の3社の合同までの約30年が、新潟人による小型木造船での陸場漁業の黄金期である。以降の北洋漁業は東京大資本による母船式沖取漁業に転換していくことになる。そのためには缶詰加工技術とそのインフラが必要となる。

新潟の漁業家も漁業から撤退する者、堤清六など合同会社の一翼を担う者と別れる。そしてその拠点は北海道に移ることにになり、再び新潟湊に戻ることはなかったのである。